

戦後80年

# いま伝えたい 戦争の記憶

昭和20(1945)年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎えてから、令和7(2025)年8月で80年が経過します。戦争を体験した人々が少なくなる中、その貴重な体験を次世代に引き継ぎ、平和の大切さを広く伝えるため、市民の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介します。

## 第12回 広島が消えた(前編)

木村 美子<sup>きむら よしこ</sup>さん 昭和16年生まれ

日本が真珠湾攻撃をする3カ月前に、私は広島県にある比治山の麓で生まれました。3歳の時、教師だった父は学童疎開の引率で家を離れていたため、母と1歳の妹と一緒に母の実家がある呉に帰省していました。当時、呉は日本一の軍港であったため激しい空襲を受けていました。母の実家も被害を受け、私は防空壕の中から家が炎に包まれていくのを見ているしかありませんでした。

### 幼い私が見た地獄

家を失った私たちは親戚がいる広島の浄光寺に身を寄せました。それから約1カ月後のこと。昭和20年8月6日午前8時15分、広島に原子爆弾が落とされ爆心地から2キロメートルの場所にあった浄光寺で私は被爆しました。「ピカーッ!」と突然、目の前が真っ白になり「ドォーン」という大きな音と共に激しい振動と熱風が私たちを襲いました。母、祖父、妹、お手伝いさんと一緒にお寺の台所で朝食を取っていた時のことです。屋根、壁、柱が一気に崩れ落ち、一瞬にして私たちは下敷きになりました。本堂で朝のお勤めの最中だった住職と祖父の妹もまた、焼け落ちた本堂の下敷きになりました。私は幼いながらも、その時の音や衝撃を今でもはっきりと覚えています。爆心地から半径2キロメートル内では、ありとあらゆる物が燃え、黒焦げになった浄光寺の山門だけががろうじて残っていました。

その後、私たち家族は、まち一面を焼き尽くす火に追わ



焼け焦げた山門だけが残った浄光寺(広島平和記念資料館提供)

れながら、広島駅北側の広島東照宮へと避難しました。私は高熱で溶けたアスファルトの上をはだして必死に駆けました。衣服は燃え、髪もチリチリになり、皮膚は焼けてめくっていました。体のあちこちにはガラスの破片が刺さり、顔と上半身には大やけどを負っていました。気が付いた時には目、鼻、口だけを出して、上半身を包帯のような布でぐるぐる巻きにされ、祖父の膝に抱かれていました。真夏の炎天下、薬や水はなく、傷口にはヒマシ油が塗られただけ。すぐにうじ虫が湧き、臭くてたまりませんでした。

境内は横たわった死体と助けを求めて集まってきた大勢の人で足の踏み場もないほどでした。ひどいやけどを負った人は口々に「水…」「水をくれ…」と、うめき声を上げ、そばには男女の区別さえもつかないほどにただれた裸同然の死体が積み上げられていました。死体にはガソリンがかけられ、昼夜を問わず焼かれ続けました。その光景はまるで火葬場のようで、今でも私の脳裏に焼き付いて離れません。

さらに追い打ちをかけるように、焼け野原になった広島を超大型の台風が襲いました。広島のみは泥沼と化し、川に浮かんでいた物や死体は一気に海へと流されてしまいました。この台風によってまちは再び大きく変わってしまったのです。私たちが生まれ育ったのどかで平和な「広島」は、人々と共に消えてしまいました。

(後編は8月15日号に掲載)

市では、市民の皆さんから戦争体験記を募集しています。くわしくは市ホームページまたは文化国際課(☎20-1534)へ。



令和7年7月15日号 No.1535



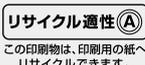
成田市のホームページ  
<https://www.city.narita.chiba.jp>

\*QRコードは株式会社デンソーウェーブの登録商標です

\*本紙は7月4日時点の情報を掲載しています。最新情報は各ページの問い合わせ先や市ホームページで確認してください。

### 編集後記

成田うなぎ祭りの季節がやってきました。「どこのうなぎ屋さんがおすすですか?」と市外の人に聞かれると「この店は皮がパリッとしていて」「あの店は身がふっくらで」とつい熱く語ってしまうのは「成田あるある」。結局、聞いた人は情報が多すぎてお店を決められないなんてことも。今年の夏の土用の丑の日は7月19日と31日です。おいしいうなぎ料理を食べて、暑い夏を乗り切りましょう。



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。